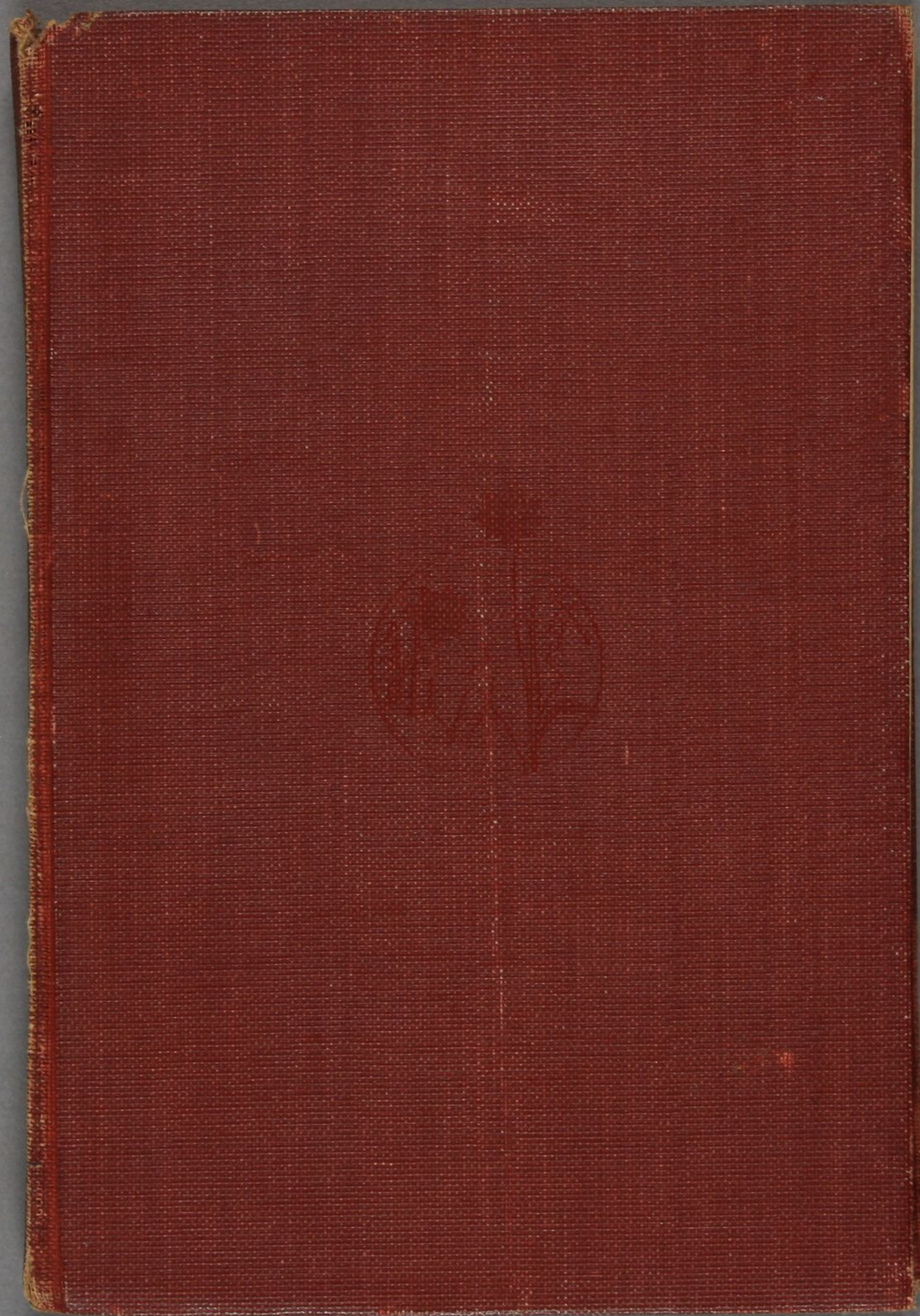


キイツの詩

田山花袋著





キーツの詩

花袋譯



キ
ー
ツ
の
詩

花
袋
譯

例言

一キーツの詩の妙は、『エンデミオン』、『ラミア』、『セント
アクネスの夕』等、寧ろ長篇にあり。されど此等の詩
は小冊中に收むべきにあらず。且、絢爛を極めたる
其詩調は容易に完全に譯し得べきにあらず。今、其
長篇の中より比較的容易なる『イサベラ』の一篇を譯す。
一奔放、幽遠、絢爛を極めたるキーツの詩を七五、五
七、乃至八六の如き平凡なる調に譯さんは不可能な
り。止むなく、散文調にして、稍々加工せるものを

二
選ぶ。直譯の弊に陥りたるは、譯者の罪なり。
一詩を譯する已に難し。キーツの如き詩を譯するは更に難し。業、中途にして、これを悔むも及はず、忸怩として慚愧の情に堪へざる者多し。讀者幸にこれを許せ。

明治三十八年九月

譯者

目次

キーツの小傳	一
野菊の歌へる	一
鳩	三
エルサが岩	五
夕暮に	七
歌曲	九
ラ、ベル、ダム、サン	一二
老メグ	一九

少女子	二二
希臘古瓶賦	二五
豫言	三一
物語の後に	三八
詩集に題す	四〇
地のうた	四三
碧	四六
生の寶物	四九
追憶	五二
懈怠	五五

アポロ大神	六四
アポロの歌	六九
テボンシエアの手簡の中に	七五
ある時	八一
幽魂	八四
戀の花壺(イサペラ、ロオレンソオ)	八七

目次終

片上天絃君譯 テニソンの詩 全一冊

浦瀬白雨君譯 ウオルヅヲオスの詩 全一冊

蒲原有明君譯 ロセツチの詩 全一冊

桑田春風君譯 シエレ一の詩 全一冊

キーツの小傳

ジョン、キーツは千七百九十五年十月二十九日を以て生る。父はムーア、ファイルトの大なる厩舎の主にして、母はジェンニク氏の娘なり。ジョン幼にして、此母を愛慕すること一方ならず、常に其の傍を離るゝを敢てせざりき。傳記家は言ふ、曾て其母病み、病床に人の入ることを醫より禁ぜらるゝや、ジョンは其時四歳なりしも、其扉の前に立ちて、その病床を護るのと三時間餘に及びぬ、と。

渠は年幼にして、其兄弟ジョルジ、トマスなど、エ
ンフィールドのクラーク氏の塾に學びぬ。此塾は其地方
に著名なる校舎なりしが、かれは記憶力に強く、よく
読み、よく誦し、よく記し、常に儕輩を驚かすを常と
せり。年漸く長ずるに及び、其塾舎に寄寓し、専ら詩
文の書を読みぬ。クラーク氏、書を藏する萬卷、其裡
には種々の珍書をも藏したりけむ、この書庫に入りて、
かれは讀書に耽りしこと幾年、十七八歳にして、其學
殖既に當時文壇の名家に超えぬ。初めて詩作の筆を執
りしは、パアジルの詩の翻譯にして、其の今日に傳は

るものは絶無なれど、しかも其調、其律に於て、既に
充分なる天才の發展を見たりといふ。

次に、渠を動したるは、スペンサーの『フェアリー、ク
イン』にして、其感化と影響とは頗る大に、當時詠ぜる
作は、皆その面影を傳へたり。

渠は早く父母を亡ひ、(母は肺病にて死したり)自から
外科醫たらしんとするの志望を起し、時の大家ハンモン
ド氏の玄關に藥局生となりて、頻に其道に研究の功を
積みしが、其學大方成りて、醫院を歴訪すべく、初め
て首府倫敦を訪ひぬ。かくてホルトレーに寄寓したる

が、此處に、クラーク氏の紹介の下に、時の文壇の名家——リイ、ハント、シユレー、ベイドン、ゴットウイン等と相識ることを得たり。

此時、かれの詩は既に書筒に満ちたるを以て、先づ、最初の詩集を公にして、以て世の批評如何を問ひぬ。當時の文士、皆な其才筆の爛熳たると其調律の諧整なるのに驚きしと雖も、しかも其偏したる詩想と豊富な空想とは却りて俗なる讀者の好尚に背き、新聞雜誌は甚だ多く其詩集の出版を注意せざりき。されどリイ、ハントは最も深きかれの奨勵者にして、この不評判に

際會せる若き詩人をして、『エンデイミオン』『レボルト、オフ、イストラム』等の長篇に心を盡せしめたるは、全く其の力なり。

暫くして、渠は醫術開業試験に及等し、漸く獨立の外科醫たるの資格を備へたれど、此時却りて明かに其身の外科醫たるに適せざるを自覺し、遂に自から其業を廢せざるを得ざるに至りぬ。而して渠は此時より『文學の人』として世に立んと決心せり。されど、詩人として充分なをパンを得るに困難なる當時代にありては、其の生存に對する煩悶苦痛はまことに一方ならざりし

なるべく、弊衣粗食、下宿屋の二階をくらき一室に、かの不朽の傑作『エンデイミオン』の筆を執りしことを追想すれば、殆ど同情の涙を禁ずる能はず。而して其大作は成れり、世に公にせられたり。時は千八百十九年、年二十四歳。これより先、かれの兄ジョルジ、新に娶りて、亞米利加に移住せんとしたりしが、かれはそをリバプールの港に送りて、それより湖水を渡りて高原地方の旅に上りぬ。先づ、アイルランドに入り、ドナカデイよりベルファスト地方を過ぎ、再びスコットランドを横り、此處に『エリザが岩』の小詩

を得、陸行すること六百哩、雨に、風に、困苦を盡して、漸くインバアネスに達せしが、一夜、惡寒惡熱身に往來して、此處にゆくりなき病を獲たり。キーツが不朽の天才を早世したる怨は、實に此處に其原因を胚胎せり。

而して首府に歸るや、公にせし其詩に對する惡評、惡罵。クオタリイ評論の如きは、これを稱して詩歌の價値なしと爲せり。新に病を獲たる蒲柳の質にして、これを聞き、これを堪へし若き詩人の煩悶は如何。シエレー、ハイロンの如き、後に至りて憤慨して、これ、

若き天才を喪ひし原因なりと揚言せしも、亦理なしとせず。

仲兄トマス此時垂死の病床にあり。渠、病の身を以て行きてこれが看護に當りぬ。而してかれが初戀にして且最後の戀たる某嬢と相見しは實に此時にあり。時を経ずして、仲兄没し、其財産は長兄及び彼の有に歸しぬ。されど詩人の所得少く且つ負債多かりしことや、其遺産の分配、長兄は一千弗を得たるに反し、かれは纔かに二百弗を領せしに過ぎざりき。かくの如くにして、戀を得て一家を成すこと能はず、友愛温情なる仲

兄またかれを捨て、逝く——かれの境遇の悲惨、想像するに堪ゆべきや。

一夕、辻馬車に乗じて寓に歸らんとせしが、途中、俄かに惡寒を感じ、歸りて臥床に横るや、輕き一つ二つの咳嗽を覺えて、忽ち口端に朱の如き血を嘔きぬ。かれはこをじつと打守りつ。『これこそは——これこそは世の常の血にあらじ、確かに肺の嘔血、その色ぞ過たぬ。今にしてわれ死の使者を得たり。我は死せざるべからず』。あゝ何ぞその聲の悲惨なるや。

されどこの打撃は一度癒えぬ。心地稍すがくしく、

衰弱また昔に恢復せしを以て、かれは其戀せる嬢の家
族と共に棲み、生活の方法として、且つは樂しき一家
庭を爲さんが爲め、曾て捨てたる外科醫の業に再び従
事せんとしたりき。

此時、かれに、南方の空氣を吸はんことを勧めしは、
友の一群なり。伊太利の暖かき地、靜かに身を養はゞ
全く其病の癒え去ることなしとにもあらじとて、若き
美術家にして且親友なるセバンは、自から進みて、其
病友の看護者たらんことを申出てぬ。かくて、伊太利
行は實行せられつ。

ネーブルに少時留り、やがて羅馬へと赴きたるが、
其處には、キーツが紹介狀携へシクラアク博士の斡旋
によりて、ヒツツア、デ、スパグナに靜閑なる一室を
賃し得たり。親しき友の看護の懇切を極めたる、殆ど
狀するを知らざるばかりなりしかど、天命の悲しさ、
若き詩人は遂にその自から起たざるを知り、ある日、
『野菊のわが身の上に生ひたるを覺ゆ』と、言ひしが、死
せんとする前、其の戀ひ慕へる嬢よりの書簡を得て、
かれは殆どそを讀むに堪へず、遺言してそを棺の中に
藏めしめぬ。また、命じて、其墓に

Here lies one whose fame was write in water."

(此處に其の譽の水に書かれたるものを眠れる)
と記せしめぬ。

悲しき言、其の得んと願ひし名譽に對して、かれは如何に絶望したりしぞや。されど、かれの譽は果して水に書かれたりしか。當時の悪評悪罵、今、痕なく消えて、英國詩壇の明星たるの名譽は晴れやかに其身後を覆ひぬ。

キーツは美しき顔容を具へたりき。其眼は大きく緑に、且つ表情に富みて、其髪は赤き鶯色。

死せし日は千八百二十一年二月二十四日。其報一たび傳はるや、英國文壇の名士皆これを哀悼すること一方ならず、バイロンは感情的なる吊辭を書し、シエレはかの名篇『アドニアス』を其の故人の名譽の爲めに書きぬ。

其墓はホノリアの廢墟の中、草深き斜阪の上にある。其墓の上に、ヘトラルカは曾てレムスの墓ならんと信ぜし大なる尖塔横はれり。(後にケイエス、セスチアスと呼ばれたる地方官^{トリヒエン}の墓なること明かになりぬ) 其後キーツの墓地の一部、羅馬の新塞の一部の爲めに

切斷せられ、千八百七十五年の頃には、草深く墓を没して、殆ど其の所在を知るに苦しみしが、フレリア嬢（サア、バートル、フレリアの娘）將帥サアビンセント、アイル、米國公使マアルシ及び他の五六のキーツの詩の愛誦者集りて、墓を修め、其附近の壁に、若く不幸にして異郷に死したる詩人の肖像を刻せり。

キーツの詩は、其大作『エンデミオン』を始めとして、『イザベラ』『セント、アグネスの夕』『ラミヤ』『ハイペリオン』等、皆有名なる長篇にして、その思想の豊富なる、其の調の整然として亂れざる、二孰れも一唱三嘆の妙を

備へざるものなし。短詩の中に於ては、『鶯の歌』『希臘古瓶賦』『エルサが岩』『老いたるメグ』など最も著名なり。思ふに、キーツをして猶十年の壽を得せしめたらんに、其詩更に一轉化を來して、深さと大さに於て、數十倍の發展を見るに至りしならむ。惜むべし、かれの天才は他の多くの詩人に見るがごとき平淡なる思想に觸るゝに至らざりき。されどその深遠にして且つ典麗なる調は、若き胸にいかに多くの希望と慰藉とを齎らし來すとするか。

キーツの詩

田山花袋譯

野菊の歌へる

一

天津日、其眼は輝く、
しかすがに見えず我が如、
月、しろがね、照るや誇耀、
しかすがに雲こそ懸れ。

あゝ春——さなり春や、
帝王すめらぎの世も如しかめやも。
繁る草葉絶間たえまよりぞ、
つね見るや、はしき少女をとめご子。

人知らぬものをも知り、
世の見得みえぬものをも見る。
あゝかくて夜の近づき
聞くや、羊ねふりの催眠歌うた

鳩

一羽、わが鳩

其やさし鳩みまかりぬ。

恨、さなからひゞき渡わたるや、わが此胸、

嗚呼あ鳩、恨み侘わびしはそも何？

一線すぢの糸わが手にまゝならぬ其脚そのあしにか。

やさし、其小さき赤き脚よ、

何故なにゆゑに汝なは逝なきし？

何故にやさし鳥吾を捨てしぞ、何故に。
汝は常に獨り森の樹、
されはぞわれを見捨てたりや。

何故にやさし鳥、
いかなれは吾と住み得ざりし。
わは接吻、幾度か
白き豆、汝に與へしを。
如何なれは緑なる森の裡の如、
住み得ざりしや、吾と楽しく。

エルサが岩

聞け、爾嗟峨たる大海の塔、
答へよ、爾其聲、海鳥の叫喚、
何時よりぞ汝が肩大潮の衣を着けたる。
大神の力、汝に混沌の初よりぞ
空のねぶりに高まり立たせしか、そも。
何時よりか其空肩鼠色の雲着けたる？
答へぬは、なれ、死よりも深き眠に入りにし爲か。
なが世は唯二つの死したる永劫、

一つは大空、一つは大海、

一つは鯨、一つは鷺——

大地動搖ぎて、倒れんまでは
眠りて覺めぬとはなる大岩。

夕暮に

あゝ吾好むや、夏の美しの夕暮、

日の光、西の空、金色の漲曳きて

薫れる微風、靜かに、柔かに、

しろがねなせる雲遙か——遙かに遠く

卑しき思の總て、世のわづらひ

振ひ去り、棄て去り、見るや、唯靜かに

自然の美の閃耀。此時

魂は唯誘はれて、喜悅、嬉樂。

温かに胸に描く、愛國の昔、
 夢みるやミルトンが運命—かのシツドニ—の棺に—
 遂に其嚴かなる顔容心に浮ひ、
 思ふに、詩の翼軽く負ひて、
 眼よりは充ちて落つるうるはしの涙。
 此時にこそ調なせる悲愁は
 吾眼に綴るや、美はしの珠。

歌曲

一

知らぬ人、馬より下り
 一言も言はぬ間に
 吾妹の百合の手執りて
 人知れず、唯接吻。

二

知らぬ人、堂に歩み
 一言言はぬ間に

吾妹の櫻子なせる唇に
人知れず、唯接吻。

三

知らぬ人、塔に上り——
——わが妹續きて上りぬ——

見よ、塔の上、手と手、
わが大神の美し薔薇の咲く處。

四

吾妹の婢、絹の引手物、
妹も得たりや、黄金の指環、

見よ、知らぬ人の接吻、
やかで出行く逞しの馬の上。

* * * * *

眠れ、眠れ、しばし、白き眞珠

此身をなが前跪き祈らしめよ。

汝を包み、汝に觸れし幸ある空氣、

吸はんかな、われ、今。

誓ひ唯、わが屈辱、わか抛擲

吾が急なる憧憬、わが大なる戀愛。

ラ、ベレ、ダム、サンが惠

あゝ何の苦み、重く卑き煩悶、
ひとり顔蒼ざめ、逍遙ひ渡るや、
湖よりの草凋れて、
鳥ははや歌ひかはさず。

あゝ何の苦み、重く卑き煩悶、
かくは瘦せ、かくは衰へわたるや。
栗鼠の穀倉は充ち、

收穫は終りぬ。

見るや汝が額に百合の花。
悲し靄、燃えし露、
また見るや、汝が頬、
萎れ果てたる薔薇の花。

牧場にて逢ひしや、われ、美女、
美しかりしよーあゝ仙なる兒、
長髪額に、軽く踏む小き脚や、

眼には自然の姿。

かきのせし吾駒の上、

終日長く見ざりしよ、何物をも。

問ふな、かれ、身を柔肌吾に寄せて、

歌ひしか、仙なる歌曲。

吾は花束を其頭に、

胸飾またかくはしの帯、

かの女見入りぬ、我に、宛如、我を慕ふが如。

微かなり優なる長息。

かれは吾に、甘き木の根、

自然の蜜またマサが露、

明かに、世ならぬ言葉言ひしよ、かの女。

まことぞ汝を戀ふは、と。

かれは吾を仙鬼の洞窟。

此處に見入るや、且つ嘆くや、深く。

此處にわれかの悲しの眼を閉ぢ――

かくてぞ睡眠の接吻。

われ等憩みしは苔草の上、

此處にわれ夢みぬ、あゝ幽愁、

曾て夢める夢の後なる夢、

この冷たき丘の邊ゆ。

再び見るや、顔蒼めし、王、皇子、

蒼ざめし武士——かれ等總て死の影。

叫ぶは誰？ 『ラ、ベレ、ダム、サンが惠、

奴隸に汝を置きぬ』と。

闇に見ゆる、餓えたる唇、

恐ろしきいましめ、烈し、戀ひ渡る。

我、はた眼覺め、見るや此處、

冷たき丘の邊ゆ。

これぞ、此處にわかさまよふ原因

ひとり淋し、顔蒼さめ、

湖よりの草しをれて、

鳥ははや歌ひかはさず。

老メグ

老いたるメグ、かの女は乞食、
人無き野原のほらに一人住みて、
臥床ふしどは鳶色林の糾草地、
家こそなけれ、扉とびらの外に。
林檎のかはりに野生の覆盆子、
通貨は樹の皮、樹の實の落ちたる、
酒は自然の白薔薇しろばらの露、
書よみは墓場の建石たていしを。

こゝしき丘を、其兄、弟、
落葉松の樹を其姉、妹、
廣き家庭にかれ唯一人
思ひの儘なる世をこそ送れ。
朝餐を食はぬもあはれ幾朝、
午餐得ざるもあはれ幾午、
夕食なくして、月の光
静かに眺むることも多しや。

されど、朝毎、忍冬の
花を尋ねて花束づくり、
夜は夜毎に暗き谷合、
汚く老いたる其手をもて
蘆の臥床を獨り編みつ。
贈るや、森に相逢ひし
貧しき小屋に住める民。

老いたるメグは后マガレット、
あるはアマゾン勇あり、義あり、

古びし赤毛布身に纏まとひ
やぶれし帽を其頭そのかしらに、
神は捨すてじよ、老いたる骨をも、
かくて逝きたる後幾年。

少女子

一
何處いどこに行くか、なれ、デボンの少女、
手にせるなが籠かご、何をか有もてる。
小さき山姫やまひめ、今、乳倉ちくらより
問はばクリイムわれに寄よするか。

二
よしやなが丘、戀こひしやなが谷、
われ、また好むや、家畜、鳴く聲。

されどそれよりも猶われ等二人
林の奥諸共に胸打騒がば。

三

吾は岩角安らかに、汝が籠を。
なが上衣そと柳に懸けて、
さてわれ等野菊の眼の如、
嘆き、接吻、青草を敷伏しに。

希臘古瓶賦

一

いまし今に碎けぬ静寂の新婦、
いまし沈黙ゆく時のやしない兒、
セルバンの史家ぞわれ等調より更に優しく
花やかなる物語をかくてぞ印する。
いまし形の邊ゆ
神、人、ふたり
テンペまたアルカデの谷、

葉濃き仙話こそまつはり絶えじ。

人よ、神よ、少女子の恨よ、

狂へる行爲、のかれの煩悶

笛、鼓、はげし狂亂、

あはれこは總て何なりや。

二

聞かるゝ調はやさしかれど、猶聞かれざる

調は更にやさしきや。されば汝、やわら、笛吹く。

知の耳ならず、更に寵づる

音なの歌こそ魂に吹けかし。

美しの若さ、木の下に、いまし汝が歌を

残し得んや、また曾て此樹空しからましや。

心剛き戀人等、曾て曾て運命には近づき得とも

接吻は遂に許らしよ―されど嘆きなすな

汝、いましの惠受けずとも、衰へじ、少女子、

いまし等戀、永劫、少女はとはをとめ子。

三

あゝ幸あり幸ある梢よ、萎れずよ

なが葉、また永久に告別の歌春には告げじ。

また幸ある歌曲師よ、勞れすに、

永久とほに新あらに、永久とほに吹ふけかし、其その歌曲うた。
 更さらに更さらに幸さいちある戀こひよ、更さらに幸さいちあり幸さいちある戀こひよ、
 とはに温ぬるかに且かつ静しずかに享うげんよ、其その娛樂たのしみ。
 とはにあくがれ、とはに若わかく
 人の世よの情なさけ遙とほに上うに總すべて吸すひて
 胸むねには高たかかる悲かな哀しみ且かつ飽あまで
 燃もゆる額ひたへや、焦こがるゝ舌しほや。

四

犠い牲えに來きりしは、そも誰たれ。
 綠きなる贄い卓く、あゝあやし僧そう、

空そらに吼こゑえたる小こさき牝め牛うし、
 其その絹ぬい上衣わ花はな輪わもて飾かざりしはいましか。
 川かみに添そひまた海うみに添そひたる小こさき市いち、
 また山やまに建たてられたる小こなる禮らい堂どう、
 この清あき朝あさ、詣まつる人の絶たえしは、何なに。
 寂せきたれ、唯ただいかにしていまし荒くわ涼れう
 とはに歸かへり得えし所い因は語はり得えんの人ひと無なしや。

五

あゝこのアツチカあつちかの姿すがた、美うしの形かたち！過くわ去こ
 大理石だいりしの男おとこ女をんな、力ちからをつくし

森の枝、踏みしだきし荒草添へて
いまし静かなる形、われ等をして
かの永劫なる力の爲すが如くに
思ひの外に梳り去るよ、つめたき牧者、
此時代、いつか忽地過ぎ去るとも、
いましこそは残らめ、われ等異なる悲哀の中に。
いましこそ人の友、それにこそ汝は言ふらめ、
『美はまこと、まことは美』と。——こは、いまし
迦具土に知りし總て、
またいましが知らんと欲せし總てなれ。

豫言

(アメリカなる同胞に)

妖の時、今そ眞夜半、
圓かに月は輝き、
閃めききらめく星の影。
其眼閃めき、耳傾く——
耳傾くるそも何をか。

詩歌にか、はた妖術にか。

おこそかにかゞやく、汝、

月は静かに蠟の温み、

聞んとや、わが言の葉。

月は其耳、黄金の耳立て――

聞けよ星屑、聞けよ迦具土、

聞けよ、なれ、とはなる大空、

歌はんよ、今、をさな子、催眠歌、

さなり、やさしの催眠歌。

耳傾け、耳傾けよ。

輝き、輝き、輝きわたれよ。

聞けよ、その催眠歌。

搖籃を編む蘆

猶淵の邊に戦ぐとも、

紐につくらんリンネン

猶綿の樹に懸るとも、

温く包まん毛

猶羊の群にありとも、

耳傾けよ、星、耳傾けよ、

輝き、輝き、輝きわたりて、

聞けよこの我が催眠歌。

をさなきもの、汝をこそ我見る

をさなきもの、汝をこそ

この静かなる中に。

をさなきもの、なをわれ、われこそ窺へ。

汝が母やさし、汝に近く

知るやをさなき——いつしかに夫ならで

さなり、詩人、永劫の姿。

見よ見よ、琴の上、

今、火の燄。

小さき揺籃の頂

燃え渡り燃え渡り且燃え渡り、

掠むるや眼の光。

眠より覺め、

其眼さながら

燃え渡る汗のほめきの如——

驚異の驚異。

見詰るや、見詰むるや、見詰るや、

そは尋常のもの、敢てせざる

小さき手、焔に高く舉げて、

しかも害なき、あやしをさな子。

一線の糸、小さき調

歌ふや、黙せるやさしのつとめ、

汝こそはうま詩人、

をさなきものよ

西の方遙かに。

なれこそは、うまし詩人

黙せるつとめ、いと楽しく、

詩人、現在、はた永劫

をさなきものよ

西の方遙かに、

詩人、現在、はた永劫。

物語の後に

このたのし物語穉樹に似たりや、
やさしき排列新に組みて、
讀む人樂しき場にと誘ひ、
彼方に此方に胸充ちわたり、
露けきしだゝり、涼しき枝より
をりく零つるよ、雨の如くに。
さまよふ調をそと目に送りて、
小脚、小鳥、行衛を知り得る。

白き、單なる、いかなる力、
やさし物語、いかなる誘惑、
曾ては名譽に渴きし此身も
讀みし其時、心は靜かに
満ちたる思ひや、草にと臥して、
歎息する其聲、小鳥を餘所に
聞かれず知られぬ人の如くに。

詩集に題す

半、眼を閉ぢ、まぶたの 瞼まぶた 樂たの しく
朝日の出づるを窺うかがふ人にぞ、
このうまし物語手に持たせて、
小川の流るゝ牧場まきば 遠とほ く、
ひとり静かに逍遙さまよ はしめん。

御空みそらのかゝやき、たへ 妙なる粧飾けはひ、
へスヘラス見て喜ぶ人にぞ

低く此詩獨ひとり誦ずさせて、
閃めく星影ほしかげ、いさよふ月影、
迷さまひの逍遙さまよ 夢ゆめ ましめん。

この喜よろこ 悅び、知しり、ほ 微ゑ 笑ゑ、な 涙なみだ、
静かに俯ふして思おもはん人こそ
直ただちに、其その 領ねう、自みづから見出みだでて
て御魂みたまを据すうへき一つの臺うたや
向むかふは彼方かなた、しつけき徑こみち、
松の傘影かさかげ、小鳥せうどりの躍をどり、

凋^{しほ}める木の葉は零^おちて亂れて。

地のうた

地^{つち}のうたこそ止^やまされや、

林^{もり}の鳥^{とり}の日におぢて

涼^{ひそ}しき森に潜^{ひそ}む時、

聲^{こゑ}こそすなれ、牧^{まき}近^{ちか}く

新^{あらた}に刈^きりし草^{くさ}の葉^はの

垣^{かき}より垣^{かき}へと傳^{つた}はりつ。

あはれ其虫かれこえは
グラスホツハー、夏の日の
驕奢おごりに獨り浴しつゝ。

自然しぜんの思、よろこびの
まゝなる聲や、疲れては
憩ふ、樂たのしさ草の中。

地つちのうたこそ止まされや、
さびしき冬の夜寒く

霜、荒涼くわうりやうのさゆる時、

竈のめぐみ求めつゝ
震よぶへるうたや、こぼろぎの
聲はた寒し、あゝ淋し。

この寒さむき夜を聲枯かれて、
草ある丘をかの外に鳴く
グラスホツハーあはれなれ。

碧

みどり、汝こそ空の命、

シンシア(月)の領日の

宮居幕へスヘラス、其車

黄金、鼠、暗色の雲のふる郷。

みどり、汝こそ水の命、

大洋―すべての流、

無数の池こそ

怒り泡立ちはた亂るれど、

素の小暗き碧ならで、

收り得べきや、永久に、静に。

みどり、汝こそ森のはらから、

侍くや、やさしき總て森の花、

忽忘草、釣鐘草、

秘密の皇后や、堇草。

唯、影のごと、

如何なれば其あやし力。

更に大いや、其眼開きて
さだめの星と活きなん時。

生の賚物

今宵われ笑ひしや、何？

答無し、聲無し。

神？ 悪魔？

御空よりやはた地獄よりや。
かくてぞ歸る、われ、人心。

心！ 汝と我

今此處に一人且ゆかしく

如何いかなれば

如何いかなれば我は笑ひし。

われ知れり、星の借地かりぢ、

わが思ひ、至大の恵。

されど今宵こよひ、今、小夜中さよなか

わが此生このせいよ止とみたらば。

美し世の徴號しるし、されくくに、

詩うたに、ほまれに、美の影に、

まことこそ身には染しむらめ。

されど更に染しみ渡るや、死、

死こそいと高かる生の寶物たまもの。

追憶

樂しき日過ぎ去り、
やさしきもの皆ゆきぬ。
やさし聲、やさし唇、
柔手、柔肌
呼吸のぬくみや、輕き私語や、
やさし其中音、
輝くや眼、整へりや形、
あはれなり、やわ腰、

皆行けり、皆萎めり。
美の影は皆わが眼より
萎めり、聲よ、惠よ、白き者よ、
夕は來りて皆消えぬ。
日暮、祭日、はた祭夜
かをり包める戀こそ今
厚かるや闇の夜の暗きを緯
織るらん、ひとり隠れし喜悅。
されど此日終日
戀の經讀みし時、

かれこそはわが齊み、祈るを見つゝ、
吾をして唯、眠に。

懈怠

ある朝、わが前三つの影、
垂るゝ首や、結ぶ手や、背さし顔や、
一つ一つ静かに、今立ち、
靴穩かに、白き袍はやさしげに
過ぐるよかれ等、大理石
瓶より出でし影のごとく、
見返るや、めぐるや、少時、彼方此方
かくてぞ又來る、宛然、其瓶

再ひめぐり移るが如くに、
 戻るや最初のみとりの影。
 昔、ヒルデア、深くさびしく
 古き器をそと携へし
 思ひの浮ぶも、あやし、我に。

あはれ其影我を知らねど、
 いかなればあやし假面に汝は來し？
 そは、わが怠りの日
 業なくて獨り居、

そを訪はんとて、
 静かに淋しく
 深くよそほひし企なるか。
 疲勞、睡眠の時の盛、
 夏の懈怠のめぐみの雲、
 今、數ふ、わが眼、わか脈は低く低く
 苦痛も痕なく
 快樂はた咲かせじ、一つの花をも。
 あゝ汝、いかなれば溶けて消えて
 我思をたゞ静かに、

獨り此處へは留め置かざる。
さなり——— 虚無の影。

かれ等過ぎ行く、今三度
過ぎつゝぞ顧る、少時、吾顔、
かくて消ゆるも、我胸は唯燃え
其後追はんの願ひの翼。
こは、われ、此の影知れるが爲め。
初は少女子、名は戀姫、
次は野心、其頬蒼ざめ

疲れし眼を永久に注ぐや。
終はことにわが憧憬
妙なる其影、妙なる少女子、
いかで忘れめ魔神詩神。

かれ等消え行く、今果して！
吾は翼を。
はかなし戀はそも何、戀はそも何處、
野心また憫れや、そは唯
人の刹那の少熱。

詩とや一否一そは喜樂ならじ——
 眠けなる晝の趣味、
 薰り渡る夕の懈怠。
 悶へより後れて一歳、
 わは月の變るも知らに、
 常識のせはし聲聞かずよ。

また再ひかれ等其影——
 添ひて來るや、あゝ何の爲
 逢ひしよ、わが眠、暗の夢路、

曾てわが魂花に閃めき、
 影に生き光に生きし
 あはれその美し草庭。
 曇りたる朝しかすかに雨は亂れず、
 懸る、睫、五月、甘き露の涙。
 窓の扉明きて新た葡萄の蔓、
 芽ぐみのぬくみ、白頭鳥の歌、
 あゝ影、今そ別るゝ時
 汝が衣の裾一滴の涙綴らぬを。

あゝ、汝、三の影、さらば！汝ははや

花咲く草の上、

冷たき床に打伏す

我頭挙げさせんの力無し。

我、情の海の小さき羊、

今ははや譽に心動かず、

消えよ、和か、わか眼より

假面にかよへる汝が姿、

再び夢める瓶の中へ！

さらば、われ、猶、夜は幻影

消えよ、汝、影、わが怠の御魂より、
雲へと。かくて再び歸り來な、夢。

アポロ大神

弓の神、

琴の神、

金髪は九輝く火の神、

戦の神、

年月長う忍びて、

何處にか——何處にか潜み眠れる、

癡呆のごと、われ、汝が花束、

汝が桂冠、汝が榮譽

汝が物語る光を戀ひ、

またわれ、虫の如——

死を戀ひて蹠ひしぞ、あまりに低き

何處にか、

あゝ、デレフイツク、アポロ大神。

雷は振ひまた振ひ

雷は鳴り、また鳴りはためく。

羽ある大鷲のとさか

怒りの爲め皆立ちて——音

震へる轟音

低うなびき

充つるや、無限の世。

あゝ何故に汝、憐憫深く

願ふか、この儚なの虫の爲めに、

何故に、汝

雷の鳴り止むばかり

柔けき笛の音吹かざる。

かくばかりはかなの精

何故にわれを、粉壺かぬ？

あゝデレフイック、アポロ大神

プレアデス、上に、

さひし、空氣、守り

種や、根や、大地

夏の餌に人肥え渡る。

となり、大海

その浮きつとめをこそ

何時か——誰か

なが植物のかれの額しばし結び、

亂れ且誇りがに
聲高く、けがれ、罵言
譽の爲め、今
汝を留むべく敢てし得るか。
あゝデレフイック、アポロ大神。

アポロの歌

一
金色の西の空
なが邦しろし召す時、
詩人ぞ始は、嚴か
英雄や、運命の曲や
烈しく搔抱く、つよき小琴、
鳴るや其糸、光、焰。

二

ホーメルぞかの強き手、
戦の琴かき鳴し、

西の國いみじき美にも

責鼓はるかに勝る。

驚異の果の果をも探り寄せて

新たなる眼、亮やかには見め。

三

其時なが空ひろく開き、

マローが琴こそとはなる諧調、

線こそ、音こそ御魂は喜び、

喜樂溢れて、呼吸はた亂れや、
かくてぞ歌ひし、悲哀、葬禮。

四

再び来るや、死の寂寞、

天地は今こそ待てれ。

桂の樹呼吸絶々に

更に動がし——さなり高き調、

ミルトンがかの轟音

驚きし天地を、そとふたゝび

ふたゝび平靜に還せしまで。

五

更に起すや、沙翁、かの手、
早く漲る情の泉―恐ろしの群よ―
烈しく弾く糸震ひ
震ひ亂るゝ琴の曲。
此時、其あやし唇あやし言こそ湧け。

六

スヘンサーは白銀の喇叭、
軍の曲静まり果てし時、
新しき調より流るゝや

かの汚れぬ貞操の讚嘆の歌。

そは静か、エオリア(神の風)の琴の震音
妖の音静かに呼吸づき
震へつゝ且つは消え行く。

七

次はタツソー、熱き調や。
楽しき空へとそひて漂ひ、
常に睡眠に若きを誘ひ
快樂の牧よりそを起しつゝ―
さて動く、糸の上、其指緩やかに、

消ぬるや、御魂、憐憫に、はた戀に。

八

されど汝、九つの星集め、
歌の總ての力を結び、
全き調を奏てん時こそ
吾等地にありて耳傾けむ、
消え行く音は、御空を蔽ひ、
夕暮、美はしの耳を迷はし、
かくてぞ汝より詩人大神
受けばやな、天の生。

テボンシエアよりの手簡の中に

此夏を此處に暮し得ん、

此處、僧のテエイン(河)

また、王のテエイン(河)

さやかに梳るや、川の頭、

其處に流に、添ひて

汝こそは得め、クリーム、

四邊は總て麥の茂り。

其處に、アーチの流、

また其處に落葉松の小流――

共に、水車多くめぐらせ

群れたる魚のあつさ、清め、

光るや、その白銀の腮あざど

其處に、深き森、

やさし被衣かつぎや、

下には見ゆる、遠牧とほまき、羊群ひつじ、

黄金色こがねいろせる草の葉に

みとり瘦やせたる穂ほの亂れ、
少女の衣すその裾すそをこそさせ。

其處にニユートンが沼、

槍穂草あらし、粗らかに、

一線すぢに見ゆるや、たのし夏。

其處には市の少女をとめやさしく
來るや集ふや闇やみに逢あふべく。

其處にはバルトンが富

溝や、堀や、

生牆には鴉を住ますべく、

また、うつろ樹、

飛び唸る蜂の爲めに、

また、河岸、

土蜂の巢の爲めに。

あゝあゝ

下に野菊、

蓮華こそは覺めたれ。

堇は白く、

しろかねの光。

碧なる蕾、長く穂の尖に。

誰が行き得む、

をくむきソホウに。

誰か饒舌し得む

みにくし髮心なの評。

今は此處新たに草刈

蟋蟀の鳴音微かに、

たのしかる田舎の夏。

追憶

思ふな、はしき少女、さなり——

そと涙をそゝぎなすか。

嘆くとも、そをこそ

何處——何處にか。

悲しげに見ゆるな——はしき少女。

悲しげに萎れ果てゝ。

灑ぐとて一滴、真に唯一滴、

あゝ死しの爲めに生れし吾等われら。

なほ顔蒼かほあをさめ、さて泣くか、少女子。

泣け、われ、涙味あぢはひ得て、

後のちの日の追憶おもひで

其處めぐみにこそ恵もとめむ。

日に光る流ながれ、それよりも猶なほ

美しや、なか眼めのかゞやき、

汝こゝろか私語こゝろけるやさしの調しらべ、

流るゝ水みづより更にやさしや。

さいへ長く總すべての悲愁かなしみ

籠こめんや、其處めぐみ、刹那せつなの恵めぐみ、

われ等また——されどわがこの哀歌、

あつき接吻くちづけの哀歌あいかたれ。

幽魂

そこにこそ幽魂はあれ、
其處にこそ幽魂は痛め、
其處にこそ幽魂は燃ゆれ、
其處にこそ幽魂は嘆け。

あはれ魂！

わが額を低く下る

なが力ある翼に蔽はれて。

あはれ魂！

烈しき情に撲たれて、見るや、
汝が蒼白ささびしき顔。

其處にこそ幽魂は笑へ、
其處にこそ幽魂は酔へれ、
其處にこそ幽魂は躍れ、
狂ひわたる尊し魂。

あはれ魂！

汝と共に我こそ遊べ
そと推すや、モマスの肱。

あはれ魂たま！

我われよりぞ閃きらめき得たりや、

コマスの酒宴さかもりあはた更に新に、

バカナン酒の神の紅潮こうてう。

戀の花壺

(イサベラ、ロオレンゾオ)

—

美うましいサベル、悲かなしいサベル、

ロオレンゾオ、若々し、戀こひの虜とりこ。

二人ふたりこそ胸打騒さわぎ、悶もたえなくて

對むかひ居られね、ひとつ家にぞ。

互互に打添うちそひ、嬉うれしと思ふも、

敢あて座まらじ、同じ食卓じきたく。

さなり、同じ屋根やねの下得もとも眠ねらじよ。

しかすがに互に夢、互に涙。

二

朝毎に其戀は愈やさしく、
夕毎に増るや更にいや深く、
家、野、花園何處に行くとも、
身にこそ添へれ、美し其影。
少女はをとこ、聲をたのしみ、
まさりて聞くなる、葉の音、草水、
奏づる琵琶には其名の反響、
編みつる刺繡をも且は忘れて。

三

少女子姿を顯はす戸の前、
先知る、かさがね、柔手の觸るゝを、
窓にほのめく美し姿
遁ざし隼鳥其眼の如くに。
互に仰ぐや、なつかしこひし、
夕空ほのめく金星の影。
かくて悲しき思ひの夜すがら
待ちぬ、慕ひぬ、朝戸のやさ音。

四

五月かなしくかくてぞ過ぎて、
水無月瘦せたり、二人の頬。

『あくる日こそ、われ此願

あくる日ぞ打明けめ、少女子に』

『ロオレンソオ、汝が唇戀に焦れずば

翌日の夜、われ早見じ』

夜毎二人はかくこそ枕に、

されどあはれ、

過ぎ去る、蜜なき日の幾日。

五

觸れ得ぬ唇いよ、蒼ざめ、

イサベラ遂に病の牀の上、

若き母をさな子の苦し痛み

疲勞を休めん時さながら。

男は思ひぬ。『いかに病むとも

わが此思語らであらんや、

語らんかな、いかでこの胸、此苦

見交しの眼徴號違はずば、

さなり、其涙われ拭ひ、

苦み、われ輕うせむ』

六

こはあゝ一日美^{うつく}しの朝、かくて終日^{ひねりす}、
 しかすがに烈し、其胸、鼓動^{こどう}、
 心の底^{そこ}打明^{うちあ}けんの願望^{ねがひ}は燃ゆるも
 其力得^いんの祈禱^{いのり}——されど怒潮
 壓^{おさ}するや、其聲^{そのこゑ}、振^おひ去^さるや其決心^{さだめ}。
 高^{たか}かる願望^{ねがひ}しかく燃^もえても、また
 低^ひうたゞよふ、をさな子の思
 あゝ情^{ゆき}の往來^{ゆき}、やさし、烈し。

七

また一夜勞^あれてや目覺^{めさ}めし、
 戀、幸^あなのくるし一夜を。
 されどイサベラの早^{はや}き眼^めの光^{ひかり}
 見る、其額^{ぬか}高^{たか}くあらゆる象徴^{しるし}
 額は蒼^{あを}ざめ且^し死^しの影^{かげ}。
 かくてそを少女^{せうじよ}子の強^{つよ}き——やさしげに
 『ロレンソ』——少女^{せうじよ}はたゆたひぬ。
 其聲^{そのこゑ}、其眼^{そのめ}こそ餘^{あまり}を語^{かた}れ。

八

『イサヘルよ、今こそ、我、

なが耳に、此苦痛、

汝は知るか、思、苦、

戀ひ渡り、戀ひ渡り

今、魂、運命にこそ臨め。

わは嘆かじ、汝が手押すとも、

はた汝が眼吾を見詰むるとも、

只、次の夜吾はかくては生きじ、

この煩悶の反抗、

九

『戀よ、吾を冬の寒きより誘ひ、

少女よ吾を夏の國へと導く。

この樂し朝、生熟のぬくみに

開き出でん花をこそ味はめ』

男、かくて、其舌稍つよく、

露の調、詩の調、

忽ち來るや、恵、幸福、

さながら咲き出づる水無月の花。

十

別れ、空の上踏み、

微風に吹かるゝ二つの薔薇の

再びの逢瀬更にはげしく
 互の薫を分たん爲めに。
 少女は其室、うつくし小歌
 うたひぬ、甘き戀の快樂。
 男は翼、西の丘の邊ゆ
 日に告ぐ別離、其の喜び。

十一

二人はまた逢ふ、日の夕暮、
 輕き被衣を星より脱ぐ時
 更にまた逢ふ、夕毎、夕暮、

輕き被衣を星より脱ぐ時、
 かをり、草花、小亭に寄添ひ
 知られず聞かれず樂しかりしを、
 憂し悲し快樂は時の間、
 閑、好奇の耳や、よろこぶ悲哀。

十二

薄かるや幸福？——いかで——
 戀人に灑ぐ涙や、
 なく嘆きや、
 死の後のあはれや、

煩悶の物語や、
いかに多きぞ、そも、黄金輝き
除き去る、唯、セソイスが妹、
遙かに路なき波を越えて。

十三

唯、戀の常なる定め、
少し、快樂、多しや苦悶、
チドは静かに森の蔭、
イサベル悶え堪へ難くとも
または若きロオレンソオ、

温き印度の丁子花心に銘すとも、
かへんやいかで此眞理、
見よ、蜂、春の亭なる戀人、
かれすらも知る、毒草、多し、
富みたる蜜。

十四

此のうまし女と住むは、兄弟、
幾代續きし富みの商賈、
かれらの爲め、幾多つかれ手
をくらき鑛穴、かしまし市場、
幾度誇れる獅子を割きて、

終日、暑き河邊の畔、
洪水の流木多きを拾ふや。

十五

かれ等の爲、セイロンの水夫や、
呼吸深く、身を裸に、
深き危険に沙魚と戦ひ、
かれ等の爲、其耳、血汐、
かれ等の爲、寒き水、死の運命、
かれ等の爲、千の人、廣きに、暗きに
しかすがにかれ等知らすよ。安樂車

そとかへし行く。

十六

誇り、何？大理石の財、
あはれ人の涙より貴き爲めか。
語る何？美し橄欖の山、
かたし階、登り得ん爲めか。
誇り何？赤き帳簿の線
グリッキーが歌より富める爲めか。
誇り何？われ等再び聲高く問はめ、
譽の名何故にかれ等は語るや。

十七

猶、このフロオレンス、自から退き
誇りにもだえ、獲物に満ちて、
しづかに二フ、ヘブライ其國
憧れ渡るや、葡萄、乞食、
船の帆の斧——勞れぬ騾を貨に代へて
早し猫の齒、毛の斑、
智大いや、西班牙、タスカン、馬來島。

十八

此商賈、いかに

美しイサベラそと窺ひし？
いかなれば、ロオレンソオ。
さまよふ其眼を見られたるか、
埃及の時疫、其夢に迎るごと。
いかなれば西に東に其眼馳せし？
されどこは眞實なりきよ——市、商賈、
皆見る、遁るゝ兎の如く。

十九

あはれ名高し、すくれたるホツカシオ！
汝に、われ等今捧げん、この贈物、

咲くやかくばし汝が花に
 はた月慕へる美し薔薇に、
 はた又汝が百合、顔蒼さめ
 遂に聞かれぬ、悲しき調。
 さなり——この言の葉、のかなし物語、
 わびしみ味ふ今なれや。

二十

いまし許せ、われにかくこそ物語、
 いと静か、有りしまゝ過ぎ行かん。
 往昔の文、そを今詩に、——更にやさしく

改め作らん、何の罪、何の咎、
 成りぬ、——其詩すぐれしやあらずや——
 汝のほまれ、いましの過ぎにし大なる想、
 そをイキリスの言葉に移して、
 いましの思、北風に、今こそ響け。

二十一

兄弟知りぬ、其嘆きに
 ロオレンツオ、妹の戀人、
 互に烈しき狂ひの亂れ。
 いかで許り得ん、此戀、此夢、

かれはかれ等が商人、しもべ、
妹は橄欖、貴族の妻にと。

二十二

ねたし、會談幾度遂げて、
口唇嚙みしやあはれ、幾度、
罪に向ひてたゆたふ心も
遂には成りしよ、つれなの人々。
鋭き小刀、惠を切りて、
決めぬ、一日、森蔭くらく
ひそかにあやめん、ロオレンソオを。

二十三

かくて樂しき朝の日や、
日の出、花園の亭深く
凭るや欄干、——時しもぞ、白露
蹈みて語り寄る、

「汝、静けき、満ち足れる
姿や、いまし、ロオレンゾオ、
わが爲めに、馬をし御して、
行けかし、涼空。」

二十四

『われ等、いざ此時

アペニーンの山彼方三里や、

逍遙ひ來れ、汝——暑き日

薔薇の露の乾かぬ前』

ロレンソオ、常、儀正しく

くちなはの企知らぬに聞きて、

急ぎ行く、其身じまひ、

帶や、刺馬輪や、引緊る騎手の衣や。

二十五

中庭過ぐる時、

三步しばし停まり、

耳傾くるや少女の朝の歌、はたやさ音、

烈しきたゆたひ、情の亂れ、

聞さしは笑聲、いと樂しげに、

見上る彼方、姿かゞやき

格子の裡、笑顔明らか。

二十六

『わか戀イサベル』

言ひぬ、かれ、『あゝわれ、戀し、傷まし、

朝の別、汝に告げで、

獨り行くわが思、
 とはにもし汝が戀失ひ
 闇にわれ、一人沈まば――
 否、されど不吉の言葉、時の間に
 歸り來ん、また』
 『さらば！』と少女、
 かくて後に、樂し、笑聲。

二十七

二人の兄弟、はたロオレンソオ
 フロオレンス、町外れて、アルノの流

岸長く水充ち、蘆は戦ぎ、
 うつくしの眺め――渡頭、
 兄弟の顔いと暗く佗しく、
 ロオレンソオ戀に晴れやか。かくてそ
 皆、水を渡りて森深く。

二十八

此處にロオレンソオ殺されし。
 此處、其森にぞその烈し戀終りぬ。
 あゝ一つ御魂其自由得し時、
 さひしさに傷む胸――さなり、胸騒ぎて、

さなから罪抱く恐しの獵犬の如、
劔を水に、刺馬輪慌し當てし、
兇手、まつしぐら、馬を家路。

二十九

偽りて妹に語りぬ。

ロオレンソオ、ゆくりなう

商賈の誘ひに、

今、陸の彼方、千里の外、と。

あはれなり少女子、醜草とはに壓して、

『希望』の群を呪咀に去りつ。

今日かれを見ず、明日も亦
あさても悲哀の一日憐れや。

三十

少女は泣きぬ、死せん願、

晝は終日、夜、夜もすがら

戀に代へたる幸なの思や。

思ひは唯々繁れる野草

夕暮其影微かに來りて、

さひしき大空、微けき悲嘆、

其時、少女は腕かきひろげ

臥床に私語く聲低く、
『何處？何處にか』

三十一

されば慾こそ戀の從兄
單なる思ひにいつか瘦れて、
胸はさびしく、情はた動き、
悲し其戀、旅に、あはれに、

三十二

秋の中頃、夕暮寒く
冬の氣吹は遠より來り、

病西風絶えず吹き、
亂すや、木の葉、色ある總てを。
歌ふや、死の歌草葉の裡に、
北なる洞窟出て來る前に
總て此世を空しく爲すべく。
イサヘラ次第に病篤く
姿形の美も衰へて。

三十三

ロオレンソオの來らぬ故にそ、
蒼ざめ眼を聳て少女は問ひぬ、
屢々く兄弟に。

いかなる悪魔か引留めつとて
 かくまで長きはそも何故？
 かれ等語りし、絶えさる慰籍、
 罪、今ヒンノムの谷の烟
 夜毎、夢にと入り来るうめきや、
 見る、唯妹が雪の墳墓。

三十四

少女逝くらん、露も知らずに、
 をぐらき死よりも猶をぐらき
 ある物、さながらはげしき薬

呼吸絶え棺に入りにし亡者の
 俄かに蘇きたるためしの如くに。
 あるは佗しき印度人の禮堂
 一突の鎗、胸に頭に、
 もえたる焔を生ぜしごとくに。

三十五

そは幻影、眠むたきをぐらき闇、
 真夜中、少女の臥床の裾、
 立ちしは、泣きしは、ロオレンソオ、
 森の墳こそ、曾て一度

日に輝かがやきし髪かみをも汚けがし、
口唇くちには冷ひやたき運命さための神、
やつれし聲こゑに、笛ふえそと吹ふきて、
眞土まづちかぶりし耳みみをぞかけて
涙なみだの谷やこそ泥どろにけがれし。

三十六

蒼あはさめし影かげ、かなし聲、
さなから土つちより目め覺さめしことく、
語りぬ、イサベル、其調そのしらべ。
其處そのところには疲勞つかれ、恐おそろし、震搖ふるひ

痿こへたるドルイの小琴こごとな奏かなで、
嘆なげくや、幽ゆなる、低ひし、歌曲、
墓かみ吹ふくわひしさ夜風よかせ悲かなしく。

三十七

眼めは荒あれたれと、猶戀なほこひの露つゆ。
恐おそろし影かげをも魔まの閃耀かやに
少女しょうにょの心こゝろを和なげ静しずめて、
をくらすき時ときなる恐おそろし怨恨うらみ
— 驕慢憎惡うごうぞうおの兇あやなる恨うらみや—
をくらすき松まつの戸林とにさびしく

糾草生ひたる土の窄谷

此處にぞ言なく刃に斃れし。

三十八

更に語るや『イサベル、わが戀、
赤き苔桃、わか頭、

大なる焼石脚に重く、

周圍は山毛櫨の樹、木高き胡桃、

みたれ葉、落果、羊の小屋

鳴聲、臥床に水を渡りて。

行け、そゝけ、涙一滴、草の花、

墳墓ゆるぎて喜ばんに。

三十九

『今は、わが影あはれなりや、

人の生の裾そと掠めて、住むや

一人、ひとりこそ歌へ、尊し、供養、

かゝる間、人生のさゝ音遶りて跪き、

午に輝く蜂は森へと過きて、

寺の鐘、今、時、

わか魂こそ痛め。

四十

『われ、吾を識り、われ、吾を思ふ。

幽魂^{ゆうこん}狂^{くる}はんの時、われ等^{くら}狂^{くる}はむ。

地なる快樂^{けらく}は忘れ果つとも

蒼^{あを}き影こそ墓^{はか}を温め

さなから光の谷より率^いて來し

わか友、天使^{てんし}や、

喜、美、更に大なる戀』

四十一

幽魂^{ゆうこん}嘆^{なげ}く、『さらば！』——かくて消えく、

靜かに騒^{さわ}きて、彼方^{かなた}とはなる闇、

それぞさながら健^{けん}なる夜半^{よは}の熟睡^{うまゐ}、

崢嶸^{せいとう}の道思ひ、無益^{むやく}の勞思ひて、

眼^めをし枕の上に置く時、

かゞやく闇の巴^{うづ}渦燃え立つ如くに、

悲しイサベラの眼^ま縁^{ぶた}痛まさらめや。

黎明^{しのめ}、少女^{おとろ}子驚き目覺^{めさ}め、

四十二

『あゝ、あゝ、知らざりし、此^{つら}辛き世、

妾^わは唯^た單なる不幸、

運命^{さため}の神、意地^{いぢ}悪^{わる}う

われ等幸ある目を一線に
放つところを思ひしに、

罪ありとは—兄弟が血、小刀。

やさし幽魂、うれしや、

いざ妾訪はん、汝が眼、接吻、』

四十三

朝や少女子、

ひそやかに且知られず、

其墓訪ねて、

後なる眠りの歌、

はた又夢路直路、

心決め—老乳母具すや一人、

いさ、佗しらの森の墓。

四十四

川を渡りて、

囁くや、老乳母。

森ひろく見渡して、示しつ、小刀。

『何のあつき焰、もゆるか、何のよき物、

汝、また笑まんか』

夕暮来りぬ、

見出しつ、ロオレンソオが墓、
焼石、苔桃。

四十五

緑なる墓場逍遙ひ

あやしむくらもちの如、

土堅く、墓堅く、

殻、骨、棺をひそかに、

飢え、死の犠牲なる形を憫み、

再び人の幽魂に歸さん爲め、

あゝ其時、イサベラ、ロオレンソオが前、

跪きし時ぞ休日なる。

四十六

新た、亂れたる墓に見入るや、一目。

唯一目、其秘密すべて明か、

明かに、さなり水晶の井の底深く

蒼ざめて横れる屍の如くに。

かくてそ殺されし地に添ひし少女、

これぞ窄谷おのれと生ひし百合の花、

少女、俄かに、小刀、掘るや

墓、其もえ心、守銭奴も如かめや。

四十七

絹の縫ひある紫むらさきの手套
土けがに汚れしを自から捨て、
そを唇、石いしよりも冷き
胸むねの焔えんの氷こるや、乾ひるや、
あゝかくてぞ、再び少女をとめは
堀ほるや、堀ほるや、其土、其墓そのはか。

四十八

老いたる乳母うは、驚異けういや、
さはいへ、悲かなしの此ち勞力らうりよく

見るに、憐憫あはれみ心に萌さして、
跪かく墓かみ、髪かみも亂みだし、

遂すなには手をぞ少女かに假かしつる。

辛苦しんく、勞力らうりよく、三時ときを過ぎて

觸ふれし其墓かみ、墓かみの主あま、

イサベラはいと静かに。

四十九

あゝ何處いづこ、また見ん、この佗たし光景さま？
いかなればしかく長く其佗たし墓道さま遙よへる？
あゝ昔物語むかしものがたりのやさしさ、

そは唯樂器の歌、單なる調。
—今こそは歸れ、此昔物語。
味へ、此幻影の音樂蒼ざめ。

五十

ヘルシアの劍、
それよりも鈍き鋼鐵に、
斬る、形なきものゝ頭を。
さいへ、人こそあれ、其やさしみ
死猶生の如き。昔の琴語りぬ、
戀は死なし、生くる、とはなる大君、と。

假人、戀は曾て死すとも、
蒼ざめしイサベラ、接吻、低き嘆きや。
こは戀、冷たく死すとも
しかすかに永劫に滅びず。

五十一

ひそやかに家に携ふる
これ、總て、イサベラ、獲物や。
亂れ髪金櫛に梳りて、
回眼深う飾る、總てのしもと、
けがれ、眞土、

井の滴しづくの冷たき涙に
そを清め、拭ふや、
梳るや、なげくや、終日ひねもす、
接吻くちづけ、はた悲嘆なげき。

五十二

絹衣——アラビイに摘みし
草の花、露つゆやさしく、
嚴かなる液、上に解とけて
冷たし、くちなはの管新あらたに流るゝを——
少女は包みて、其墓そのはか選ぶや

花園の壺

祭壇墓壇新あらた備へて、
涙に乾かぬやさし形見かたみをこそ据すられ。

五十三

星や、月や、日や、
樹こすゐの梢遙ほろけき蒼や、
水の流るゝ窄谷せまや、
寒けき秋あきの微風こよや、
すべて少女は忘わすれ果てゝ、
暮くれ行く一日も、あけ行く朝あさをも

知らずよ、分かずよ、唯靜かに
とはに戀ひしき形見の壺、
眞心、涙に曇る眼や。

五十四

薄命の涙そゝぎて、
濃絲、美の影、やどるもあはれ、
烈しきかをり、市なる花壺も
いかで如かめや、こはあゝ自然
生の恐れや、はた朽ち果てし
隠れ碎けの頭のかをりや。

さながら眞珠靜に包みて
尊く木の葉蔽ひし如くに。

五十五

あゝ幽暗、とはにさまよふ、
あゝ音楽、佗しらに鳴る、
あゝ反響、さひし島より
知られざる苦み嘆き——さなり嘆き、
悲し幽魂、頭を舉げて、笑ふや、
頭を舉げて、やさし魂、且重け、
微けし死、扁柏の薄暗く、

白き墓、白銀にかつ／＼輝く。

五十六

メルポメネの烈し咽喉

嘆けや總て悲嘆の句。

青銅の琴、悲しの調觸れて、

神秘に鳴る糸一線、

風に連れて悲しげ、低く、

理りや、イサベル、今、

死の影、やこに近く

凋れ得ん、さながら、棕櫚の樹、

薫りの爲、伐られし如くに。

五十七

あゝ棕櫚自から凋み行かめ、

風更に寒く吹くに忍びじ。

兄弟、少女の眼、

絶えぬ涙に、心留めて、

若し、美し、

いかなれば凋み行くと、

疑ふや、怪しむや。

五十八

更に驚くや、怪しむや、少女子終日、
 緑の花壺、
 花は榮ゆる、魔の力。
 驚くや、更に、
 若き少女子、萎み、
 花やか、樂み、且つ消え果てし、
 たゆたひの戀の記憶——それすら
 萎ませたる、何の力。

五十九

力、思、かくれし秘密、

知らんとて幾日か。
 されど無益や、
 少女子は其傍去らず
 去るも又急ぎ、歸る——
 卵かへの森の鳥の如、速か、
 牝の鳥の如、つゝまやか、
 形見の壺の邊ゆ去らで
 涙にぬるゝ髪や。

六十

猶かれ等かくし壺、

ひそやかに見んとこそ願へ。

見し、みどり緑、あざ青黒

認むるや、かしら頭、ろおロオレンソオ、

かくて今、其罪の報酬かれ等は得つ。

遂に住み馴れの故郷去りて、

とはに歸らず、行く、

かしら頭、ちしほ血汐帯びたる追放。

六十一

あゝ幽暗、ゆうあんそか眼をかへせ、

あゝ音楽、おんがく鳴るか、わび侘しら、

あゝ反響、うれひ憂愁の島より

あゝ悲嘆や、ひたん

悲哀の幽魂、あゐイサベラ、あいか哀歌要せじ、

やさしイサベラ、し死なめ、

さひし悲し死をこそ得め。

今、かれ等形見の壺持ち去りぬ。

六十二

形見の壺、かたみ死、むかん無感、

しかすかに戀ひしらに少女は尋ぬれ。

昔の聲やさしけに、

逍遙の巡禮

何處にか、形見の壺、何故に、

かくしたる、『酷しやな』少女子、

『わが形見、妾より奪ひて、』

六十三

少女は嘆きぬ、逝きぬ、捨てられて

臨終、猶求めつゝ、其形見を。

あゝあはれ、此戀物語、

市人泣かざるものこそ無けれ。

口より口へと言ひ續き語りて、

家より家へと歌ひかはして、

今猶語るや、悲しの調。『酷しやな、

妾が形見、妾より奪ひて』

キーツの詩終

明治三十八年九月二十日印刷
明治三十八年十月五日發行

キーツの詩
（定價金五十錢）

編纂者兼
發行者

平山勝熊

東京市京橋區尾張町一丁目一番地

印刷者

佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

不許複製



發兌元

東京市京橋區尾張町一丁目
會社資隆文

館

Y2250

横瀬夜雨君著

▲定價金四十五錢
▲郵税金六錢

花守

夜雨君は眞詩人なり、其詩や眞詩なり、眞情の聲なり、眞情其まゝを攫み出して、直ちに紙上に抛ちたる血塊の跡なり、之を讀めば哀音惻々として直ちに人に迫り、悲雨凄風襟を吹いて、人をして嗚咽し、啼哭するに堪へざらしむ。眞韻、獨り此人に聞くべし。眞情獨り此人に探ぬべし、茲に「花守」の一卷は、渠れが胸中の怫鬱を集めたる一篇の哀史にして而も靈彩渾然として、絶えて一點の汚塵なき神品なり、夫れ筑波は濃紫に暮残るたそがれ、眉蹙み、面蒼き詩人の悌を此篇に髮髯して、誰れか筑波根詩人の薄幸に暗涙あり、此の詩才の天成に瞠目の感あらんものぞ。

東京隆文館發兌

三宅克己君畫

▲クロース製詩集形
▲金文字入高雅美本

隆文館發兌圖書目錄

文學博士 桑木嚴翼先生著

●時 代 と 哲 學

定價 小包料 金一圓二十錢

文學士 加藤玄智先生著

●宗 教 講 話

定價 郵税金 金九錢十

●黑岩 淚香君著

●精 力 主 義

定價 郵税金 金四十八錢

●小島 烏水君著

●日 本 山 水 論

定價 郵税金 金一圓三十錢

●久保田 米僊翁著

●美 感 新 論

定價 郵税金 金七十八錢

田山花袋君著

◎紀行草

伊藤銀月君著

◎日本海賊史

伊藤銀月君著

◎海國日本史

法學士 上田樞雄先生著

◎最近世界商業史

史學界編輯所編纂

◎日本史要

川崎安先生著

◎人躰畫法

郵定價 金六十八錢

郵定價 金五十八錢

郵定價 金六十五錢

郵定價 金八十八錢

全二冊 定價 金一圓十錢

郵定價 金九十五錢

棚橋絢子先生 嘉悅孝子先生共著

◎新案 日用家事讀本

婦人科醫 平山英治先生著

◎女子衛生訓

小兒科醫 小澤鹿十郎先生著

◎小兒の育て方

井上善兵衛、嘉悅孝子合著

◎烹新書

成女學校 烹部立案

◎節理家庭曆

活動之日本同人著

◎暹羅の富源

上下二卷

郵定價 各金六十六錢

郵定價 金四十五錢

定價 金三十五錢

上卷(下卷近刊) 定價 金四十八錢

小包料 定價 金三十五錢

定價 金三十四錢

活動之日本同人著

●南洋諸島の富源

活動之日本同人著

●南清の富源

活動之日本同人著

●北米の富源

活動之日本同人著

●滿洲及西伯利の富源

吉田秀造君新著

●世界の樺太案内

草村北星君著

●露子夫人

郵定 稅價 金三十五錢

郵定 稅價 金四十五錢

郵定 稅價 金三十五錢

郵定 稅價 金三十八錢

郵定 稅價 金三十五錢

郵定 稅價 金二十五錢

郵定 稅價 金七十五錢

●加藤眠柳君著

●田口掬汀君著

●小栗風葉君著

●伊藤銀月君著

●無名氏選

●草村北星君著

●

彩 色

之 人

丈 夫

一 百 人

萬 朝 一 口 噺

クリスマスお伽噺

郵定 稅價 金六十五錢

郵定 稅價 金六十五錢

全二冊 郵定 稅價 各金六錢

全三冊 郵定 稅價 各金四錢

郵定 稅價 金二十錢

郵定 稅價 金四十八錢

坪内博士序 * 片上天絃君譯

其の詞章や典麗、其の調律や巧妙、謳ふところの情緒纏綿として、穩健なる理想は漂渺極まりなきもの、之を英の詩宗テニソンに見る可し。マシウ・アーノルドをして、「蒸溜せる語にやどれる蒸溜せる思想よ」と叫ばしめたるまことに故なきにあらざる也。渠が秋風白露、夜窓を訪づるゝ時、一卷の沙翁をもちて、平靜和樂の一生を終りたるよりこ

テニソンの詩

美本全一冊
定價金卅錢
郵税金六錢

ゝに十幾星霜、世はつれに此の詩宗を讚美するを止めず、而して之を本邦に介するもの未だ之なし矣、譯者日夕の愛誦を興じて、こゝに本書を作る、巧みに原詩の妙を捉へて、譯筆自在、句々一として其が神髓を傳へざるはなし、キーツの絢爛、ウオヅウオチラスの瀟洒を味ひたるものは、又、正に此の平和詩人の理想美に惚れざるべからざる也。

八
三